

第5回桑名市国際化推進検討委員会 会議概要

日時・場所	令和2年2月5日（水）9：30～11：30 桑名市役所本庁舎 5階中会議室
出席者	委員：5名 市（事務局含む）：9名
会議次第	<ol style="list-style-type: none"> 1. 開会 2. 市長挨拶 3. 事項 <ol style="list-style-type: none"> (1) 桑名市の英語教育 (2) 国際理解教育の推進について (3) 国際観光まちづくり推進事業 (4) 多文化共生事業について 4. その他 5. 閉会
概要	<ol style="list-style-type: none"> 1. 開会 2. 市長挨拶 <ul style="list-style-type: none"> ・近年、国際化が大きく進み、今年もまた国際化の大きな波がくると思う。桑名市でも4年前のジュニアサミット以降、様々な状況が変わってきているが、グローバルな感覚を意識する中で、国際化に向けた様々な取り組みを継続していきたい。 ・桑名市英語教育プランでは、9年間を通してつけたい英語力を「グローバル社会で通用するコミュニケーション力」と設定し、15歳で英語を使って桑名の自慢ができるようにということを目指している。昨年度から新たに始めた子ども英語コンテストなど、英語に慣れ親しむ子どもが増えている。 ・多文化共生の今後の課題は市内の外国人（約4,000人）にどう手を差し伸べていくか。外国人の子供たちに対応するため、学校現場も大きく変わってきている。全く日本語が話せないまま学校に来て本人も現場も大変な思いをしている。 ・教育旅行や産業観光も進めているが、良い面も悪い面もある。国際的な流れの中で、産業観光として来日する人が減ってきている。その中で桑名市をどのように開いて、国際化していくのか、忌憚ないご意見を賜りたい。 3. 事項 <ol style="list-style-type: none"> (1) 桑名市の英語教育 <ul style="list-style-type: none"> 《英語コンテスト》

・2回目ということもあり、1回目よりさらにパワーアップした。聞いている側も新たな学びがあるし、課題も出てきたが、今後も続けていきたい。特に、『桑名自慢』部門は子どもたちが自分の住んでいるまちを改めて学んで紹介できるので、とても素晴らしい取り組みだ。ただし、安永餅など、グループでテーマが被ってしまうこともあった。

⇒毎年、聴きに来る市民もいる。同じ桑名自慢にならないように幅広くテーマを決めないといけない。例えば、桑名のオーソドックスな名所や食べ物だけでなく、自分の学校のこと家族のこと、住んでいる地域のことといった点にも目を向けてみてはどうか。

・基本的に学校で学んだ英語を使うプログラムなので、英語に自信のない子どもでも参加でき、その過程で自信がついていく子どもがいる。

・英語コンテストもイングリッシュデーも、とてもいい取り組みではあるが、参加人数は合計100人弱。参加人数が限られているのが残念。特別な舞台を用意するのも大事だが、毎日の勉強の積み重ねで、一人でも多くの子どもに英語に対する自信をつけさせたい。

・入賞者の発表は楽しそうで良いとも思うが、コンテストに至るまでの過程が重要。疑問が2つある。

①英語コンテストの参加者の選考基準は？予選会をしているのか？

⇒予選会等はしていない。完全公募。人数制限するほど集まっていない。大舞台で発表するのはハードルが高いのかもしれない。

②今回は小学5年生37名とあるが、市内の全小学5年生の何パーセントか？

⇒現在桑名市内の小学生は1学年約1000人程度。37人という数字は少ない割合である。

・英語コンテストの時だけ勉強するのではなく、例えば、普段の授業の中で桑名の歴史について、ちょっとでも触れる機会があれば、子どもたちの意識も変わるのではないか。桑名全体の自慢でいえば、前述のように安永餅などに偏ってしまう。住んでいる校区に細分化させて写真等使って発表してみてもどうか。「こんな地域にこんなものがある」と小学生が自慢げに話して、他の地域の人がお互いを知り合う機会になる。色々な工夫ができると思う。

・仕組みが活かされていない。発表形式の授業を受けて、その延長で英語コンテストを紹介されると、いきなり「公募します」と言われるのではハードルが異なる。普段の教育とこの英語コンテストの乖離が埋まらないと、「全ての子どもたちが英語で桑名を説明できる」という目標に繋がらないのではないか。きつい言い方をすれば「やる側が、やれる事だけ、やっている」と見える。先生たちは一生懸命やっているのはわかるが、桑名市の子どもたちの国際化にかみ合わさっていくのか疑問である。

- ・海外から来ている子どもたちはこのコンテストに参加しているのだろうか。英語でブラジルの子とコミュニケーションを取るのと、日本語でブラジルの子とコミュニケーションを取るのは違う。その経験ができないか。国際化とは共通言語を使って理解し合うもの。桑名の子どもたちも英語を母語としない子どもたちと共通言語を使って理解しあうことができれば、桑名の中で「模擬国際化」のようなことができる。
- ・市内にフィリピン人の子どもが結構いる。英語を話せない子どももいるが、英語を話せる子はおそらく親も熱心なのだろう。そういった子どもたちに活躍の場を与えたい。学校で英語を話せることが周囲に知れると、その子がワンランクアップするようなイメージ。外国の子どもたちも参加できるようになればいい。
- ・孫がオーストラリアに行ったり、英語教室に通ったりしている。とても楽しんでいるようだ。歌で英語を覚えさせるらしい。学校教育も歌を取り入れたらよいのではないか。

⇒英語コンテストでも歌の部門を作ったらどうか。

- ・ネイティブ級に話せる子たちでディスカッションするのも刺激的。学校で学んで一生懸命頑張って到達する点と、それ以上の「子どもでもここまでいくのか」という高い到達点の違いをみせる。子どもたちに中途半端な到達点を設定させるのではなく、凄まじい到達点をみせて、「ここまでいっている子がいるのだ」と考えさせる。全体の底上げにもいい。日本人は差をつけるのは良くないというが、ある程度差を見せることも必要ではないか。
- ・英語コンテストが通過点になるのか、到達点になるのかで、取り組み方が随分変わってくる。学びの英語のなかでは通過点であるだろう。実践的な英語を身に着けるという点では通過点のごく入り口の部分だろう。私も自宅では英語で会話を行う英語デーを設けている。今回のコンテストの映像を見ると、参加者は自信に満ち溢れているし、ステージから降りた瞬間、満足した笑顔を見せているのではないか。その自信ひとつひとつが、桑名の子どもたちに伝わるような取り組みをしていきたい。
- ・この成果と課題を引き継いでいく。あと8回残っている英語コンテストは、市民が「見に行きたい」、子どもたちが「参加してよかった」と思えるように続けていきたい。
- ・2年かけて経験を積んできたが、いくつかの課題も見えてきた。10年間で、毎年階段をひとつひとつ昇るように課題を解決し、市民が「見に行きたい」、子どもたちが「参加してよかった」と思えるように続けていきたい。そのためにも仕組みとして波及させていくことを考えていく。ここまではほぼ良い完成度だと思うので、裾野を広げていく、頂点を伸ばしていくことを考えていく。
- ・これまでの反省点からの課題として、中2の子どもたちをどういう風に募集する

のかということが挙げられる。こんな活動がありますよと学校のほうに大きく PR しておかないといけない。ポスターを貼ってチラシを配るのは5月頃だが、その頃は新年度で配布物が非常に多い時期。なにかに挟み込んで、数か月後に出てくる状態。活動を知らない子どもが市内に沢山いる。

⇒英語の時間に新小学5年生や新中学2年生に録画したDVDを見せて、「こんなありますよ、どうですか？」と問いかける。カリキュラムが時間的に非常にきつい状態だが、このコンテストに参加するのもしないのでは全然違う。英語が上手い、上手くないのではなく、大きな舞台に立って発表すれば人間として良い経験になる。英語がペラペラじゃなくても意思疎通できるのだ、とハードルを上げずにやってみたらどうか。

⇒初めに入賞者のビデオを見せるだけでも、イメージが変わる。チラシにリンクを貼るのも良い。お金をかけずにビデオを見せるのは簡単な時代になっている。

「こんなことやってるんだ」と全員に必ず伝えるのが重要。チラシだけでは、「一応伝わっているけど、何をやっているのかわからない」状態。方法のみ認知され、中身を知らないのでは、何もわからないのと同じ。録画を見れば、5分で全部わかるのだから。適宜できる範囲で周知の方法を変えてはどうか。

(2) 国際理解教育の推進について

- ・公立小学校の教育旅行の受け入れが少ないのはなぜか。

⇒教育旅行の受け入れ事業の打診は中国からが多い。先方からの依頼を受けてから実行するまでの期間が約1か月と短いので、カリキュラム上、公立の学校では調整が難しい。しかし教育委員会と、どのような期間であれば受け入れが可能か、日程調整を重ねた上で意欲的に取り組んで行きたい。2017年に台湾の小学校が教育旅行に来たときは、津田学園と公立の小学校で受け入れることができた。

- ・英語の授業時間数も増え、先生のスキルも上がってきたが、多くの小学生が国際理解に関心がないまま英語の授業を受けている。教育旅行などの機会があれば「英語って役に立つのだ」と感じることができる。一方で「外国語＝英語」ではない。世界には様々な言語を話す人々がいて、英語を母国語として話す人が多いわけではないということを理解してもらう。

⇒例えば台湾の子どもと日本の子どもを1時間といった短い時間でも一緒に遊ばせてみる。お互い英語がペラペラでなくても、英語を使って意思疎通を図ろうとすることは子どもたちにとって貴重な体験になる。

- ・日本人は英語を誤解している。英語をペラペラしゃべる必要はない。英語はコミュニケーションツール。中国をはじめとするアジアの国はどこでも一応英語でコミュニケーションが取れる。子どもたちに「背景の違う人々と理解し合うにも英

語は便利なのだ」と理解させる。最終的にはネイティブとディスカッションできるレベルになればいいと思うが、日本人は肩の力が入りすぎだと感じる。“完璧でないといけない”と思っている。文法で少しでも間違えると×を付けられる、そういう状況ではやはり積極的に話すことができない。「試験の英語とコミュニケーション英語は違うものだよ」と理解させる。難しいのだけど、教育旅行を通じた交流などでそれを感覚的に理解していくことができる。

- ・教育旅行の受入れに関して、いろいろな国から何でも引き受けよう、という姿勢は大変。相手はどんな人たちかもわからない中、1か月の期間で引き受ける、それは大きなストレスにならないか。相手先をある程度固定化するのはどうか。ただし、学校で固定化すると幅が広がらないので、例えば台湾の淡水区（台北市）では交流都市を探している。桑名市とよく似た条件の市とMOUなどを結んで、向こうでアレンジしてもらって小中学生を受け入れる。担当者も経験を積んでいけば、どの学校でもパターン化出来るから、初めての学校だとしても安心して受け入れができる。長期にわたる交流が続くとあらかじめ分かっていたら、お互いに「この時期はこういう事をやって、その次はこれをやろう」と、全部パターン化できる。今は、申し入れがあるたびに「点」で解決しようとしている。経験値としては残るけれど、担当者が代わっていくとまた一から始めなければならないというのも、大きなストレスとなるだろう。
 - ・日本から海外へホームステイなどで送り出す仕事をしている。スケジュールでいくと、最低半年前には物事が決まり始めるスタートライン、それから交流が始まる。訪れた瞬間よりも、前もってどのくらい交流できたかに重点を置いている。そうすれば当日、より深まった価値あるコミュニケーションが取れる。教育旅行に関して、どうして依頼が1か月前なのか。飛行機の手配等を考えると、もっと前に物事が動き出しているのではないか。桑名市を訪れる前後にどういうスケジュールがあるのか、他の訪れた地域とどういう違いがあるのか、それを含めて桑名市らしさを出していく。SNSで生徒同士が事前に交流が出来るようになれば、もっとより深いコミュニケーションが図れるのではないか。
- ⇒国民性の違いか、中国や台湾では1か月前でも「まだ何も決まっていません」と言われることがザラにある。やはり、前述の台湾の淡水区（台北市）のように要望のある特定の地域との交流基盤があれば、1か月前の突然の依頼にも応えることが出来る。相手のことも知りながら付き合っていくという環境も整えていけば、担当者も教育旅行の事業を進めていきやすくなる。
- ・教育旅行はすでにある程度パターン化されていると思うので、モデルをいくつか用意するのもいい。実際、公立学校で受け入れる際に、子どもたち向けにもマニュアルのようなもの（交流の際に役立つ一言英会話のようなイメージ）で準備してみてもどうか。実際、交流するといっても短い時間なので、その長さの英会話

なら、子どもたちも暗記できるのではないか。それが上手いけば、子どもたちの自信にもつながるし、練習している英会話が役に立つのが実感できるだろうと思う。そうすれば、全く何もわからない状態で交流するよりも英語を好きになる子が少しでも増えるのではないか。

- ・日常の中で英語を使う機会が少ない。長期休みにホームステイを体験すれば文化も触れることができるし、会話の上達が著しい。金銭的に難しい部分もあるが、是非とも行ってほしい。津田学園は修学旅行で海外に行っているが、公立高校では行かないのか。桑名市の生徒として、海外に行く機会を作っているのか。

⇒津田学園の高校生は台湾に修学旅行に行っているが、桑名市内の公立高校はおそらく海外には行っていない。

- ・受け入れることで経験できる国際感覚と、外に行って経験できる国際感覚は全く違う。アジアに行くと国境が無くなっていくのが実感できる。言葉は分からなくても当たり前のように国境を越えて旅行している。その中で、ちょっと高級な憧れの旅行先が日本であり、海外旅行は普通の旅行の延長上という認識。日本人の大人は海外旅行に対して、言葉が通じないから行かない、とか構えてしまう部分がある。その感覚を子どもたちにまで持たせてもいいのか。

- ・外国の子どもたちは YouTube で日本のインディーズの曲を聴き、アニメを見て、生で聴きたい、見たいと思って日本語を勉強している。日本でも外国でもいいなと思えるものは国境を越えて、当たり前子どもたちに吸収される。大人が肩の力を入れすぎて壁を作っている。受け入れる側も肩の力を抜いて、高い壁を乗り越えさせるような感覚ではなく、フラットな地面での交流をさせるべき。

- ・友好都市をつくり、「第二桑名がそこにある」という感覚でやってみてはどうか。英語をペラペラ話せることが国際化ではない。国際化とは「世界はひとつ。自分の行動範囲は地球」と思えることだと思う。桑名をもっと世界に向けて開いていくことで、「桑名が好きだから」と様々なひとが訪れ、住んでいく。桑名を出ていった子どもたちが「桑名がいい」と戻ってくるのが理想。

- ・様々なデバイスが発達している。これから小学校も一人一台パソコンになっていく。そういうものを活用した国際理解教育について意見を賜りたい。

⇒時差の問題がなければ Web 会議のようにスカイプなどを使って交流してはどうか。簡単でコストがほとんどかからない。教室での Web 会議と聞くと仰々しいが、学校間同士の交流だと、予め決めた時間帯にお互いが普通に見える状態で話ができるのはいいと思う。

⇒長期のホームステイはいろいろと負担が出てくるが、Web や SNS を通して交流するのは大きな効果があると思う。

- ・私の大学の会議は英語で行っているが、そういう会社の様子を社会見学として生徒に見学させるのも良いかもしれない。国際化が進んでいる桑名市の場所に子ども

もたちを連れていき、到達点をしっかり見せる。これが当たり前だよと感じさせることも大切だと思う。

- ・イギリスの小学校と Web 上の交流（スカイプ等）をするのは時差の上で難しいが、台湾やオーストラリアならできるかもしれない。同じ経度の国で探すといい。
- ・今まで来た学校と Web 上の交流をするのもいいと思う。また、交流の1つとして、e スポーツなどを活用することもできると思う。入り口だけ作ってあげて、子どもたちが提案をしてきた時に、認めてサポートしてやる姿勢が行政として求められる。柔軟な姿勢が大事。

(3) 国際観光まちづくり推進事業

- ・目指すべきところは国際的な産業観光。今年度末までの受入れ人数が伸び悩んだ原因の1つに、担当者の人事異動が挙げられているが、担当が変わることで受入れができないというのは残念なので、体制の整備をしたほうがいい。こういった事業は継続性が大切だと思う。将来的に地域に多くの人々が来て、お金を落とし経済効果を生み出してもらうのが産業観光の大きな目的。コロナウィルスに負けずに、長く続けていくのが一番大事である。

- ・コロナウィルスは一過性のもの。いずれは事態も収束すると考えている。市の産業のために何を目指すべきなのか考えないといけない。産業観光で来桑してもらった場合、市内の見学場所は広がったが、宿泊はどうか。桑名に宿泊してもらっているか。

⇒産業観光で桑名に来てもらうからには、長く滞在してもらえるよう、また、飽きられないよう、「桑名に来たらこれ」という目新しいコンテンツを今後も考えていかないといけない。

- ・今後、産業観光をどのようなツールとして使うか。

⇒桑名市としての立ち位置をもう一度考える必要がある。

(4) 多文化共生事業について

- ・日本語を学ぶ教室に新しく外国人がどんどん来ている。最初は熱心に学んでいるが、特に実習生は仕事が忙しくなると来られなくなる。会社でそれを補うような授業があるわけでもなさそう。もう少し、企業側のサポートがあるといい。
- ・外国人は転職や引っ越しをする人も多いので、そういった場合だとなかなか地域のコミュニティにも入っていきづらいのではないかと。
- ・日本語で日本語を教えるダイレクトメソッドだと、うまく伝わらない部分もあって難しい。特に、言葉を教えるのと文化を教えるのは少し異なるので、外国人の母国語にあたる言語（例えば、ブラジル人ならポルトガル語）で日本語を教える

方が、日本の生活などをより細かく教えることができるのではないか。

⇒日本語もある程度話せて、長く桑名に住んでいる外国人住民に協力してもらったり、そういう人たちと集まる機会（コミュニティ）を設けたりすることで、地域社会と共生していくことができればよいと思う。

- ・外国人児童・生徒への日本語指導などについて、すべてを桑名市だけで対応しないといけないのか。予算も期間も限られている。同じ悩みを持つ近隣市町（四日市や鈴鹿など）とお互いに協力して、取り組むことも大切。合同で半年間くらい預かって、日本語や文化の基礎レベルを上げた形で、どの子どももすぐ学校に行けるよね、という状態になるのが理想。

⇒実際に、松阪市と鈴鹿市では小学校に入る前のプレスクールがある。子どもだけでなく、親も心配をできるだけ低減できる。3回くらいにわけて説明を受け、先生方と遊びながら基本のルールを教わる。他市と協力して取り組めば、少ない予算でもプレスクール等を実施することが可能なのではないか。

- ・外国人住民の中には、言葉がわからないために、学校についてくわしく知ることができず、手続きができていない世帯もあると聞く。市役所に行って住民登録しないと、就学案内の手紙が来ないことを知らない外国人が多い。日本国籍でない子どもは義務教育ではないため、学校に行っていない子どもも少なからずいるのではないか。そういった状況を把握し、小学校1年生から教育を受けさせたい。もっとPRしないとイケない。

⇒桑名市では外国人が戸籍住民登録課に来たら、必ず子どもがいるかを確認して、教育部門の課に案内し、就学の機会をなくさないようにしている。個別で外国人の情報が入ってきたら、その都度対応している。外国籍の子どもは義務教育ではないが、日本語を学んで就職までできるような機会を保証している。

- ・日本人が中卒で就職することはほとんどない。外国籍の子どもでも大学まで進学できるような世の中になってほしい。それは日本語教育から始まる。

- ・最低限、全ての子どもがこのレベルまで仕上げた方がいいという日本語教育の達成度を作ったほうがいい。その時に予算がつかないと担当者の負担になるかもしれない。外国人の労働力で企業の業績が上がり、産業がまわっていくのだから、税金をここに使うべきだということを市民に理解してもらわなければならない。また、非常勤ではなく、常に対応できる常勤職員の体制を組むべきである。

⇒桑名市でできないなら他市町とも連携をするべき。最低限のクオリティーを保つための人員を担保する。外国人が増えたならサポートする人も増やしていかななくてはならない。現在、担当者の方は頑張っているが、頑張っても追いつかない状況になってきているのではないか。

- ・今年度、プレスクールを試みる。松阪市などのプレスクールは1、2か月と長期にわたっているが、今回は市民団体が主催なので1日で様子を見る。まず自分の

	<p>関わっている小学校の入学者を中心にして始める。行政の目標は子どもたちが日本語をマスターして文化を知り、学校で困らないようにすること。私（市民団体）は子どもがどんなことを教えたなら学校が楽しくなって、親も楽しくなって、日本に来てよかったと思えるようなことを伝えていくことを目標としていきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 四日市や鈴鹿まで広げなくても、近隣のいなべ市、木曾岬町、朝日町の子どもたちに日本語を学ばせたいという需要がある。特に木曾岬町は外国人の割合が高く（5パーセント以上）、外国人の子どもも多い。小学校は1校だけで、その小学校は昔から国際化が進んでいる。当時勤めていた小学校の先生の話では、多文化共生・国際化推進事業は熱心に取り組んでいるらしい。そのようなところと連携していけたらいい。 ・ 去年の台風19号時に、桑名でも避難についての連絡があったが、市のHP上にある英語版（Googleの自動翻訳ページ）をみたら、避難所の名前が直訳（固有名詞の漢字の意味をそのまま訳す）だった。存在しない場所に避難してくださいという全く使えない情報だったので、見直しが必要ではないか。 ・ 外国で生活する上で、その国のやり方を理解することは言葉を理解するより大事。日本とアメリカでは役所のやり方が全く違う。それを知っているだけで、言葉以上の解決策になる。その国への馴染み方・作法等を手順を追って知ることが大事。
担当課	市長公室 ブランド推進課